



**International Development
Youth Forum 2017**

Final Report

国際開発ユースフォーラム 2017 報告書

“What is development?”

“Corporations and Development”

11th – 19th , March, 2017



目次

はじめに

代表挨拶 3

顧問推薦文 4

第1章 団体概要

団体理念・目標 6

団体の歩み 7

第2章 IDYF2017 概要

フォーラムテーマ 8

議論の土台 9

応募者・参加者内訳 11

第3章 フォーラム報告 16

第4章 各チーム紹介 29

第5章 各チーム最終発表概要 34

第6章 参加者からの声

参加者アンケート結果 39

Memory of IDYF2015 (参加者からのコメント) 41

OBOGからのコメント 47

第7章 運営報告

事業スケジュール 48

後援・協賛 49

会計報告 50

運営スタッフ 51

おわりに

IDYF2017の成果と課題 52

はじめに

代表挨拶

今年 5 周年を迎える国際開発ユースフォーラム(IDYF)は、創設以来一貫して「多様な価値観や経験を結集し、より良い未来を共に創り上げる」ことを目指してきました。今年の IDYF でも、その想いを実現するために、参加者が多様な意見をぶつけ、徹底的に議論し、協働する経験ができるよう、様々なプログラムを練りました。参加者達は、時に議論が紛糾しまとまらずに途方にくれた時もありましたが、粘り強く議論を続け、最後には集まったメンバー1人ひとりの知見を結集して解決策提案まで辿り着きました。

IDYF は決して楽なフォーラムではありません。フォーラム中は、脳を存分に回転させ、且つ、熱い想いを持って議論に取り組まなければならないタフな時間が続きます。そのような中でも参加者たちが開催期間中、毎日期待に満ち輝いた表情を浮かべるのは、IDYF が「多様な価値観や経験を結集し、より良い未来を共に創り上げたい」という共通する志を持つ仲間が集まっていることを実感できていたからでしょう。フォーラム終了時に、多くの参加者から「このような多様な参加者が集まり、真剣に議論を交わすことができるフォーラムはなかなかない。参加できたことを誇りに思う」という言葉を投げかけられた時、私たちは IDYF のバトンをこれからも繋いでいかなければならないと切に感じました。過去 5 年間の歴史を引き継ぎ、そして新たなアイデアを取り入れる文化を大切にしながら、さらに充実したフォーラムを目指すべく、次年度へと繋いでいく所存です。

最後になりますが、今年のフォーラム開催にあたり、多くの企業様・団体様、先生方、OBOG の皆様にひとかたならぬご支援を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

是非、本報告書をお楽しみ頂ければと思います。

国際開発ユースフォーラム 2017 共同代表

田原早耶香 齊藤美沙季

顧問より

日本の若者が「内向き」になったと言われるようになって久しい。日本国内にも数多くの課題が山積していることを思うと、ある程度は仕方ないことではあるけれども、他方で、世界にはまだ一人一日 100 円未満の所得水準で暮らす絶対貧困人口が約 13 億人(日本の総人口の 10 倍)おり、インドの幼児(5 歳未満)死亡率(6%)は日本のそれ(0.3%)の 20 倍である。IDYF を立ち上げた諸君のように、世界の問題に直接関わりを持つキャリアを目指す若者が、それでも少なからずいることは心強い限りである。

IDYF は今年で 5 年目の比較的若い団体だが、参加者のネットワークは着実に積み上げられているようだ。今年度の企画では、「“Development”とは何か」を根本から考え直し、各々が描く社会の理想を語り合いぶつけ合うことを中心課題として設定していると聞いている。とりわけ海外参加者にとっては、日本人と日本社会に直接触れ、さらに日本の若者たちと密度の濃い議論の場を持つことは、彼らが将来的どのようなキャリアを志向するにせよ、大きなインパクトを持つであろう。

この文章を目にしている皆さんは、国際開発に多少なりとも関心を持っている人かもしれない。国際開発に関わるキャリアは途轍もなくやり甲斐があるものだ。好きで選んだ仕事は何十年やっても全く飽きないし、辛い時でもいくらでも頑張れる。しかし同時に、様々なしがらみもできてくる。途上国の様々な立場の人々(政策担当者、研究者、田舎のお百姓さんや日雇い農業労働者まで)と会話をする機会が頻繁にあるが、一度プロになると、そこでの人付き合いは特定の社会的文脈(援助や政策助言を「与える側」、研究成果を競うライバル、研究に必要なデータを収集する側、等)に縛られ、相手からもそういう目で見られがちになる。そのような自分の立場を離れて自由に交流をすることは、必ずしも容易ではない。

しかしながら、国内外を問わず、学生の時からの付き合いの友人は別だ。初めて出会った時のように、社会的立場のしがらみから自由に付き合える。この文章を目にしている人の中には、大学生も少なくないかもしれない。学問の世界は日進月歩である。例えば、開発経済学における過去 10 年程の間の分析手法の変化や実証的発見の蓄積の速さには目を見張るものがある。ということは、大学で最新の学問知識を身につけたとしても、卒業して 10 年も経つとその知識自体は時代遅れになってしまう可能性も十分ある。他方、大学時代に築いた人脈は、一生の財産として、その価値は増えることこそあれ減ることは決してない。

今から約 30 年前になるが、私自身も大学生の時にゼミ合宿で夜通し議論をしたり、社会や社会との関わり方について昼間から酒を飲みながら語り合う友人たちと出会っ

たりすることができた。そこでの議論には、今思い出すと赤面するような、現実離れした「青臭い」ものも多々あったが、しかし、そのような青臭い時間を彼らと共有したことが、その後社会に出て様々な「現実」に直面した際にも一定の理想を追うことを諦めない、という姿勢を育んでくれたのではないか、と思っている。その友人たちは大学卒業後、民間企業、ジャーナリズム、役所、主婦、政治家、NGO、研究者など様々な方向に進んでいるが、30年経った今でも、昔ながらの社会的な柵のない付き合いが続く。そしてそのような交流は、自分の仕事にも、新鮮な刺激や反省の材料を与えてくれる。

そのような友人達が世界中の各地に散らばっているとすると、こんな魅力的なこととはない。もし30年前にIDYFがあれば、私も真っ先に参加をしたことであろう。

東京大学公共政策大学院教授

不破信彦

第1章 団体概要

団体理念・目標

●団体理念

Design Our Future

この理念には、先進国・途上国から集まった若者たちが、その多様な価値観や経験を結集して、よりよい未来を共に作り上げるといった思いが込められています。未来を生きる若者たち自身が、多様な価値観を理解しあいながら世界の課題を共通の課題として認識し、一丸となって解決策を模索することで、よき未来を創発する力を手にすることを目指します。

●目標

1. 国際開発に関心があるユースの継続的なネットワーク構築

- ・世界中から国際開発に関心を有するユースを集め、将来にわたって活用できるネットワークを構築します。
- ・プログラムに創意工夫を凝らし、参加者同士の横のつながりを強固なものとしします。
- ・アラムナイ・ネットワークの維持・発展等により、参加者同士の年度を越えた、縦のつながりを強化します。

2. 多様な価値観と深い知見に触れる機会の提供

- ・専門家の方々の協力のもとにテーマに沿ったインプットを行い、参加者が知識や考えを広げる機会を提供します。
- ・多様なバックグラウンドをもつ参加者が議論を通して異なる考え方を知り、自らの価値観を深める機会を作ります。

3. 社会に新たな変化をもたらす成果の創出

- ・単に集まり議論するだけではなく、議論の成果が社会にとって価値あるものとなるよう

努めます。

- ・ 国際開発に関心のある人々にとって、自らが生み出した成果が社会に変化を与える経験の第一歩となるよう、その機会を提供します。

団体のあゆみ

International Development Youth Forum (IDYF)は 2013 年に始まり、その後毎年 3 月に東京にて開催されてきました。開催を重ねるごとに、コンテンツや参加者の多様性の面で進化を続け、現在では世界でも有数の知名度を誇るユース国際会議の地位を獲得しています。5 年目を迎えた IDYF2017 では、昨年度に引き続き、運営側で諸経費を負担する奨学金制度を拡大し、経済的に厳しい状況にあるユースや開発に関する豊富な知識や経験を持つユースをフォーラムに招く取り組みを行いました。

会議	開催地	規模	テーマ
IDYF2013	東京	14 か国 36 名 (うち日本人 14 名)	Future Millennial Development Goals -"Mirai" Development Goals-
IDYF2014	東京	20 か国 38 名 (うち日本人 12 名)	Design Thinking×Development
IDYF2015	東京	34 か国 44 名 (うち日本人 8 名)	Hunger×Win-Win
IDYF2016	東京	28 か国 42 名 (うち日本人 8 名)	Industrial Development & Environmental Protection
IDYF2017	東京	35 か国 42 名 (うち日本人 4 名)	What is development? Corporation and Development

第2章 IDYF2017 概要

フォーラムテーマ

大テーマ

What is development? Where are we heading?

理念“Design our future”のもとに、IDYF2017 では、「目指すべき Development とは何か」を根本から考え直し、共通の理想像を描いたうえで課題解決につなげていくことを目標としました。

現在、経済発展、社会発展、コミュニティ発展など、様々な Development の定義や理想が語られています。異なる文化背景や社会的立場、経験に基づいたそれぞれの価値観を持つ人々の間で、望む Development の形は一樣ではないはずです。Development に関わる課題は、その問題の複雑さゆえ、異なる価値観を持つ個人や集団の協働なくして解決出来る問題ではありません。だからこそ、将来自国また世界の発展を担う若者が、目指すべき Development を考え、意見を共有していくことは必要不可欠でしょう。

途上国・先進国を問わず開発に携わる志を持つ若者が集まり、1 週間集中的に議論ができる IDYF では、それぞれが持つ Development の理想を理解し合い、描いた共通の理想に向かって協働する力を養うことができると信じ、このテーマを設定いたしました。

小テーマ

Corporation and Development

経済のグローバル化により、企業活動は国境を越えて活動範囲を広げ、途上国に流れる資金のうち民間投資の占める割合は ODA（政府開発援助）をはるかに凌ぐ約 7 割と言われています。途上国の発展において企業活動の存在感が急速に増し、技術移転や雇用創出、そして経済的恩恵が期待されています。一方、ときに企業活動は不法労働や環境破壊、地域コミュニティとの文化摩擦などの問題の批判対象となってしまうこともあります。このような問題は、Development の様々な定義の違いが表面化してきた現代において、特

に顕著に表れてきているように感じられます。しかし、存在感を増している企業の活動は、SDGsのような社会目標を達成するために貢献できる大きな力とも成りうるはずです。

ゆえに、将来の Development を担う若者は、そもそも Development とは何なのか、そして、目指すべき Development を実現するために企業活動はどのように貢献できるのか、考えてゆくべきではないでしょうか。本会議では、上記の問いを世界中から集まった若者ととも議論し、まだ見ぬ Development の将来を描くことを目標としました。

議論の土台

上記のテーマに沿いながら、以下の 3 つの産業の具体例を土台として、各チームが議論を行いました。

バングラディッシュの衣類産業について

ディスカッションテーマは「企業×開発」ですが、その中で「バングラディッシュの衣類産業」をケーススタディとりあげた理由は 2 つあります。

まず 1 つ目は、衣類産業が参加者にとって身近な話題であるからです。日常生活の中で服を着ないことはありません。また、誰も価格やデザイン等の何かしらのこだわりを持って、普段着用している服を購入します。しかし、その服が作られている背景を意識している人はほんのわずかではないでしょうか。そこで、ぜひ参加者には、当事者として、「企業×開発」というアプローチの潜在性が無限に広がる「衣類産業」に着目してほしいと考えました。

2 つ目の理由は、現在の衣類産業において、バングラディッシュが大きな舞台の一つとなっているからです。近年バングラディッシュは「チャイナプラスワン」として多くのアパレルメーカーから認識されており、衣類産業の生産拠点は中国からバングラディッシュに移行しております。バングラディッシュの衣類産業は女性の社会進出やバングラディッシュの開発に大きく貢献してきた一方、衣類工場での火災事故やビル崩壊事件等の目に見える形での課題も多く残っています。そこでビジネスというツールを開発に使用しつつも、その課程で生じる課題を防止・解決するための方法を考えるケーススタディとして、バングラディッシュは最適であると考えました。

ブラジルの大豆産業について

ブラジルの大豆産業をケーススタディに選んだ理由は (1) 土地収奪の問題の重要性 (2) 中所得国の問題を扱えること、さらに(3)日本とのつながりが深いことに集約されま

ず。

第一に、土地収奪の問題は、昨今の開発において非常に重要視されていることから、IDYF2017 で取り上げることに致しました。これまであまり重要視されてこなかった土地の問題が、近年注目を集めるようになった背景には、2008年頃の世界食糧価格危機や多国籍企業がサプライチェーンを世界中に拡大したことなどが挙げられます。このような比較的新しい問題を IDYF でも議論するため、土地収奪の問題を中心に据えケースを選定しました。

次にブラジルを選んだ理由は、本会議のテーマである「企業×開発」を考えるにあたり、企業の存在感の大きい、中所得国の問題を扱うためでした。ブラジルは既に JICA の円借款対象国から外れており、BRICs の一つともなっているほど、経済成長が進んだ国であります、そこで、開発の過程から取り残された人々、または開発の過程で負の影響を受けている人々に注目したいと考えました。中でも、大豆産業はブラジルの成長を牽引した産業の一つではありますが、その影の側面にも焦点を当てたいという意図がありました。

最後に、日本とのつながりが強いこともブラジルの大豆産業をケースに選定した理由です。日本は JICA の発足時から、ブラジルにおける大豆産業の援助に関わってきました。さらに最近では、ブラジルでのモデルをモザンビークにも適用する試みを、ブラジル政府と共に行っています。また、大豆は世界的には飼料としての利用が多いものの、日本の食文化においては重要な位置を占めており、近年海外でも、醤油や豆腐など大豆を使った日本の食品が注目されています。世界中から集った若者に、日本と世界とのつながりを知ってもらうためにも大豆産業が最適だと考え、ケースに選定しました。

ケニアの切り花産業について

今回ケニアの切り花産業を選んだ理由は、以下の 3 つです。第一に、「切り花産業がケニアの主要産業であること」、第 2 に「多様な社会的側面から産業の発展のあり方を考えられること」、第 3 に、「近年日本でもアフリカ花卉類の販売が行われているため、日本での開催意義を出すことができること」です。

第 1 に、ケニアの切り花産業の発展は、ケニアの今後の発展を考えるにあたり、非常に重要な側面であるからです。1970年代から現在にかけて、ヨーロッパの国々を中心に計 60 カ国以上にケニアの切り花は輸出されており、ケニア政府としても経済成長の一つの柱として今後も注力していくことが見込まれています。

第 2 に、ケニアの切り花産業は産業発展という経済的側面だけでなく、環境、労

働環境、ジェンダーなど様々な社会的側面を含めて考察する意義があると考えたからです。また、現地の切り花生産業者、それを輸入するケニア国外の企業、消費者、周辺の住民など、様々な関係者が関わっています。異なる人々の立場に立ちながら上記の多様な社会的側面を含め、ケニアの切り花産業にとっての理想の開発を考えることは、大会テーマを「開発とは何か」としている IDYF2017 にふさわしいと考えました。

第3の理由は、消費者側の立場から産業について考察できる場が日本にあるからです。今回フィールドワークで訪問した「アフリカの花屋」のように、日本でもアフリカの花弁類は販売されています。アフリカから遠く離れた消費地である日本でアフリカの切り花がどのように扱われているかを目にする中で、消費者の視点から産業に関わる課題や解決策を思考できると考え、日本で開催する IDYF における議題として適切だと考えました。

参加者・応募者内訳

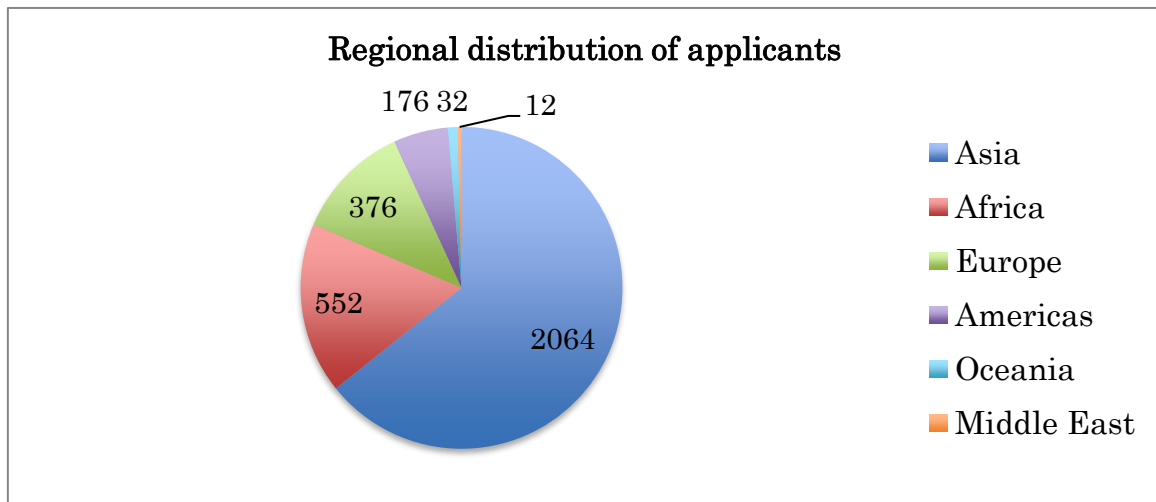
IDYF2017 は、149 の国・地域から、3212 人の応募を受け付け、その中から選抜された 42 人が参加者として参加しました。彼らは、36 の国・地域から集まった、学生、NPO 職員、会社員など様々な立場を持ち、年齢、専攻なども多様なメンバーでした。

応募者出身国・地域内訳《国・地域名及び () 内は人数》

Afghanistan(55)、Albania(11)、Algeria(25)、Angola(1)、Argentina(17)、Armenia(30)、Australia(11)、Austria(4)、Azerbaijan(29)、Bangladesh(182)、Belarus(13)、Belgium(2)、Belize(2)、Benin(4)、Bhutan(15)、Bolivia(2)、Bosnia and Herzegovina(6)、Botswana(3)、Brazil(37)、Brunei(9)、Bulgaria(4)、Burkina Faso(3)、Burundi(5)、Cambodia(113)、Cameroon(13)、Canada(12)、Chad(7)、Chile(2)、China, People's Republic of(74)、Colombia(10)、Comoros(1)、Costa Rica(1)、Croatia(3)、Czech Republic(2)、Democratic Republic of the Congo(4)、Denmark(1)、Dominican Republic(5)、Ecuador(5)、Egypt(90)、El Salvador(4)、Estonia(4)、Ethiopia(13)、Fiji(3)、France(10)、Gabon(1)、Gambia(3)、Georgia(21)、Germany(9)、Ghana(27)、Greece(10)、Guatemala(2)、Guinea(1)、Haiti(18)、Honduras(5)、Hungary(7)、India(127)、Indonesia(461)、Iran(10)、Iraq(17)、Ireland(6)、Israel(4)、Italy(8)、Ivory Coast(4)、Jamaica(3)、Japan(22)、Jordan(7)、Kazakhstan(49)、Kenya(53)、Kingdom of the Netherlands(3)、Kiribati(2)、Kyrgyzstan(51)、Laos(2)、Latvia(2)、Lebanon(6)、Liberia(9)、Libya(3)、Lithuania(7)、Luxembourg(1)、

Madagascar(2)、Malawi(7)、Malaysia(24)、Maldives(2)、Malta(1)、Marshall Islands(7)、Mauritania(1)、Mauritius(1)、Mexico(13)、Moldova(11)、Mongolia(11)、Montenegro(4)、Morocco(21)、Myanmar(33)、Namibia(4)、Nepal(77)、New Zealand(5)、Nicaragua(2)、Nigeria(55)、North Korea(1)、Norway(1)、Oman(1)、Pakistan(239)、Papua New Guinea(2)、Paraguay(1)、Peru(7)、Philippines(165)、Poland(11)、Romania(9)、Russia(96)、Rwanda(16)、Saint Vincent and the Grenadines(1)、Samoa(1)、Saudi Arabia(3)、Senegal(2)、Serbia(1)、Sierra Leone(1)、Singapore(3)、Slovakia(2)、Somalia(5)、South Africa(19)、South Korea(3)、South Sudan(1)、Spain(13)、Sri Lanka(18)、Sudan(27)、Suriname(1)、Sweden(1)、Syrian Arab Republic (2)、Tajikistan(17)、Tanzania(23)、Thailand(15)、The Former Yugoslav Republic of Macedonia(7)、Timor-Leste (East Timor)(7)、Togo(2)、Tunisia(32)、Turkey(12)、Turkmenistan(1)、Uganda(26)、Ukraine(42)、United Arab Emirates(2)、United Kingdom(10)、United States(21)、Uzbekistan(52)、Vanuatu(1)、Venezuela(6)、Vietnam(111)、Yemen(4)、Zambia(12)、Zimbabwe(24)

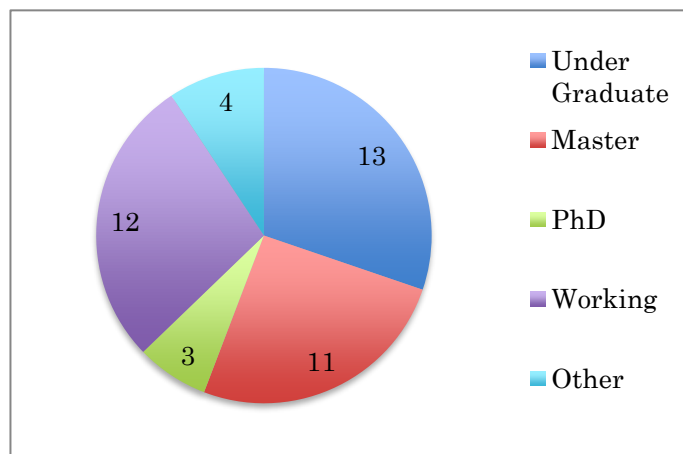
応募者地域別内訳



参加者出身地域内

Asia	17	Europe	11	Africa	4
Japanese	4	Russian	2	Botswana	1
Indian	1	British	1	Cameroonian	1
Pakistani	2	French	1	Kenyan	1
Uzbek	2	Hungarian	1	Ugandan	1
Vietnamese	2	Lithuanian	1	Middle East	4
Bangladeshi	1	Moldova/Bulgaria	1	Egyptian	1
Chinese	1	Polish	1	Jordanian	1
Pilipino	1	Romanian	1	Lebanese	1
Mongolian	1	Spanish	1	Palestinian	1
Nepalese	1	Ukrainian	1	Pacific	2
Singapore	1	Americas	4	Australian	1
		Argentine	1	New Zealand	1
		Bolivian	1		
		Jamaican	1		
		German-Canadian	1		

参加者の所属内訳



参加者チーム別の内訳（性別、所属）

Team	Sex		Status		
	Male	Female	Undergraduate	Diploma/Masters/PhD	Working
Blossom Gs	2	4	3	3	0
Cutting Edge Flowers	4	3	3	2	2
KAIZEN	3	4	2	3	2
Green Stitch	3	4	2	3	2
TOFU fighters	5	3	2	3	3
Fantastic Beans	3	3	4	1	1

チーム内の内訳（国）

Team	Asia	Europe	Africa	Middle East	Americas	Pacific	Total
Blossom Gs	1	3	2	0	0	0	6
Cutting Edge Flowers	1	3	1	1	1	0	7
KAIZEN	4	3	0	0	0	0	7
Green Stitch	3	1	2	0	0	1	7
TOFU fighters	3	2	1	1	1	0	8
Fantastic Beans	5	1	0	0	0	1	7

第3章 フォーラム報告

IDYF2017 は、2017年3月12日～17日に、以下の日程で開催致しました。

	午前	午後	夜
3月12日 (日)			開会式
3月13日 (月)	アイスブレイク	議論「開発とは」	Karaoke night
3月14日 (火)	議論（課題分析）	議論（課題分析）	Cultural Party
3月15日 (水)	フィールドワーク	フィールドワーク	Tea Ceremony
3月16日 (木)	議論（解決策考案）	議論（解決策考案） ピアフィードバック	
3月17日 (金)	議論（解決策考案）	議論（解決策考案） フィードバック	発表準備
3月18日 (土)	リハーサル	最終報告会、閉会式	懇親会、OBOG会
3月19日 (日)	観光（オプション）		

以下、各企画での詳細を、時間を追いながらご報告致します。

<DAY 1> 12th, March

代々木オリンピックセンターに 15 時から続々と参加者が到着し、チェックイン手続きを済ませました。18 時過ぎからは IDYF2017 オープニングムービーを皮切りに、オープニングセレモニーが始まりました。過去のフォーラムや今年の参加者の写真、IDYF 創始者の宇佐美さん、池上さんからのメッセージをまとめたムービーに、参加者たちはこれから始まるフォーラムに心弾ませたことでしょう。そして、共同代表が開会の挨拶を行い、世界各国からはるばる日本に集まってくれたことへの感謝の気持ちと共に、議論を通じてかけがえのない仲間を作り、価値あるものを持って帰って欲しいというメッセージを伝えました。その後、団体顧問の不破先生からスピーチをいただきました。不破先生からは、志を共に議論することで育まれたネットワークは今後の人生で大きな糧となるため IDYF での時間を大切にしたいというメッセージを頂きました。その後、共同代表の田原から IDYF2017 の趣旨説明及びテーマ説明が行われました。意見そのものの違いに気付くだけでなく、互いの経験や生まれ育った環境の違いまで理解し合うことで議論を深められる場が IDYF であること等、IDYF に対する熱い想いを伝える時間となりました。



19 時半からはウェルカムパーティーを開催しました。たこ焼きや焼きそば、巻き寿司、チョコレートファウンテンなど様々な料理が並び、食事を楽しむ様子が見られました。料理や飲み物を片手に積極的に交流する参加者が多く、IDYF 設立理念の一つであるネットワークづくりの第一歩となりました。5-6 人で和気藹々と出身国紹介をしているグループもあれば、2 人で熱く政治体制について語り合っている参加者もあり、皆、互いのことをより深く知ろうとしている姿勢が感じられるパーティーでした。最後は、全体で記念写真を撮り、翌日から本格的に始動していこうという雰囲気のもと、パーティーはお開きとなりました。

<DAY 2> 13th, March

Day2 は、自己紹介とアイスブレイクから始まりました。年齢もバックグラウンドも様々な IDYF2017 の参加者が、今後のフォーラムにおいて忌憚なく議論をするためには、お互いを理解し、かつ打ち解けることが必要であるためです。自己紹介では、各人の今までの活動や来日後の感想を一人ずつ話してもらいました。驚くような経歴や日本でのユニークな体験を耳にし、参加者たちは楽しいひと時を過ごしたようです。アイスブレイクでは、会場の外に出て「隣の人の名前は何でしょうゲーム」を行いました。皆の名前を覚えないと勝てないゲームに、参加者は歓声を上げながら取り組んでいました。寒い日でしたが、ゲームが終わるころには寒さを感じないほど熱中していました。

Day2 の午後は「開発とは何か」をテーマにした2つのワークショップを行いました。1 つ目のワークショップは「写真から多様な開発のあり方を見る」セッションです。



参加者には事前に「その国の社会問題を表す写真」を提出してもらっていました。参加者は3-4人のグループに分かれ、提出してもらった写真の中から1枚を各グループに配りました。その写真について気づいたことや疑問に思ったことをポストイットにどんどん書いてもらい、さらにポストイットを「自然」「経済」「社会」「意思決定」等のキーワードに基づ

いて模造紙に貼り分類してもらいました。目的としては、開発には多様な側面があることを知ると同時に、自分の中に存在している考え方の偏りを認識してもらうことでした。同じ写真を見ても出身国の違いにより、ものの見方が異なることに驚いている様子も見受けられました。また、各班の発表後には「答え合わせ」として、その写真を提出した参加者に写真の解説をしてもらいました。このワークショップを通じて、写真の撮影者もそれ以外の参加者も新たな視点を得る良い機会となりました。

2 つ目のワークショップは、「私たちの国づくり」セッションです。目的は、理想とする社会について多様な考え方があることを知ることです。手順は以下の通りです。まず、「教育」「ガバナンス」「平等」「経済成長」「安心・安全」「自主性」「生活のゆとり」などといった、社会に求める価値が書かれた9枚のカードを、まずは個人で優先度に従い並べてもらいます。その後、意見をグループ内ですり合わせ、国づくりをする際の優先順位をチームで決めてもらいます。どの班でも「教育」が高い優先度にあったこと

が印象的でした。しかし、中位と下位の優先度のものは班のメンバー構成などによって違いが生じていました。国家のガバナンスの重要性の是非について、熱い意見が交わされたことも印象的でした。また、運営メンバーの意見を参加者から求められるなど、運営・参加者全員で開発の多様なあり方を認識する時間となりました。

2つのワークショップの後、チーム発表およびケース課題のブリーフィングに入りました。今後一週間の議論を共にする仲間と出会い、改めて自己紹介などをする光景が見られ、皆少し興奮気味のようでした。チーム名決めでは各ケースの産業にちなんだチーム名が多数みられました。

続いて、5名の奨学金参加者から、各産業における各々の研究内容や現場での経験などを発表する発表会が行われました。

大豆班に所属する奨学金参加者は、農学専攻として学んだことや、自らの研究で得た知見をもとに、ブラジルにおける大豆生産や貿易の概要、課題について意見を発表しました。衣類班の奨学生の一は、マクロ的な視点からの問題提示を中心に発表を行い、もう一人は実際にバングラディッシュの縫製工場を見学した経験を生かして、現場の様子を中心に発表しました。そして、切り花班の奨学生の一は、自らの研究をもとに、サプライチェーンの仕組みやケニアの切り花産業の概要について数字を用いながら説明した上で、自然環境、労働環境、小農家と大企業の力関係など様々な課題を紹介しました。もう一人の工学専攻の奨学生は、切り花栽培が盛んなナイバシヤ湖の対岸ウガンダで学ぶ学生であり、切り花産業が引き起こす水質汚染について発表しました。

各発表の後には、各々のチームに割り当てられた産業にこだわらずに班をまたいで活発な質疑応答がなされ、全参加者が3つの産業における現状や課題を認識する場となりました。

<DAY 3> 14th, March

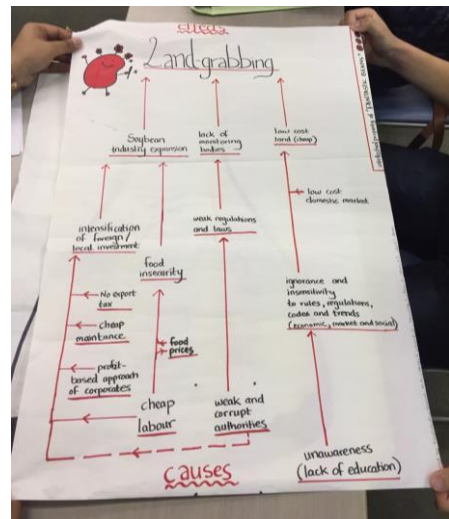
Day3は二つの目的を設定していました。第一の目的は、Day2での議論を通して考察した「開発」のあり方へ向けた目標を達成するために、各ケース（バングラデシュにおける衣類産業、ブラジルにおける大豆産業、ケニアにおける切り花産業）において最も重要な解決すべき課題は何かを各班が特定することです。第二の目的は、Day4でのフィールドワークへ向けた事前準備でした。

はじめに産業ごとの概要資料を確認した後、事前に参加者が提出課題として考えてきた各産業における課題をグループごとに共有しました。産業ごとの概要資料は運営委員会で作成した独自の資料と参考文献でした。また、フォーラム前に提出してもらった宿

題の内容は以下の通りです。①各参加者に割り当てられた産業のケース（バングラデシュにおける衣類産業、ブラジルにおける大豆産業、ケニアにおける切り花産業のいずれかひとつ）に関して参加者の母国語で書かれた記事を見つけ、英語で要約すること、②それぞれの産業が持つ課題を



3つ指摘し、それぞれを2, 3文で説明すること、③3つの問題のうち、最も重要である問題を選び、その理由を説明すること、でした。チーム内で行う本格的な議論の初日でしたが、早速活発に意見を交わし、これから始まる具体的な議論への期待を強めたようでした。ただし、各ケースの最も解決すべき課題を特定する際には、チームごとに進捗状況の差が見られたり運営側の当初の意図が伝わらなかったりと、初回ならではの問題に直面しました。運営側も参加者も、丁寧かつ効率的なコミュニケーションの必要性を痛感しました。



夜のカルチュラル・パーティーでは参加者が自国の民族衣装等を身に着けて一同に会し、華やかな場となりました。スタートは日本文化に関する〇×クイズで始まり、最後まで正解し続けた参加者に景品を贈呈するものでした。クイズの正解を発表するたびに参加者から日本文化に関する鋭い質問が飛び交い、参加者の日本に対する関心の高さが伝わってきたイベントでした。

その後、IDYF Photo Contest 2017 の表彰式を執り行いました。このフォトコンテストでは、フォーラム前に参加者



から送られた自国と自分を紹介する写真を IDYF の Facebook ページにアップし、フォーラム直前までの「いいね」数が最も多かった上位三名を表彰しました。また、このフォトコンテストは参加者が Facebook 上で IDYF の投稿をシェアすることを通し、多くの人に IDYF を知ってもらい、IDYF の関係者以外の方にも一緒にフォトコンテストを盛り上げてもらうことも目的にしておりました。多くの参加者が投稿をシェアしたことで、フォトコンテスト優勝者は総計で 1200 以上の「いいね」を獲得し、IDYF の知名度も向上したと思われまます。パーティーでの一通りの企画を終えると、参加者同士の交流時間となり、自国のお土産を配ったり参加者同士で写真を撮影したりと、一同の親睦がぐっと深まった夜でした。

<DAY 4> 15th, March

DAY4 では、全体が各ケース班別に 3 つに分かれ、オリンピックセンターから出てフィールドワークに赴きました。以下、各産業班ごとの活動内容報告です。

【衣類班】

バングラデシュにおける衣類産業チームはフィールドワークにあたって、消費者と生産者というサプライチェーンの両端からの検討をすることを目的とし、午前中は消費者への衣類に関する街頭インタビュー、午後は国際労働財団訪問と活動内容の調査を行いました。

午前中の街頭インタビューは衣類産業チームを 3 つのチームに分け、そのうち 2 チームはバングラデシュにもサプライチェーンを持つ某有名ファストファッション企業への消費者意識調査、もう 1 チームはバングラデシュに自社生産工場を構え、途上国の可能性をものづくりを通じて世界に届けることを理念とするブランドへの消費者意識調査を実施しました。街頭インタビューの具体的な質問内容は大きく 2 つに設けられ、ひとつは「あなたは衣類を購入するときに何を重視するか。」、もうひとつは「あなたはどのように衣類が作られているかを知っているか。もし知っているとしたら服を購入する際に意識するか。」という質問でした。これにより、購入する店やブランドによって消費者の衣類購入に対する意識が異なることを考察することができました。街頭インタビューでは参加者は慣れな



い日本であるにも関わらず積極的にインタビューを行っていました。

午後は衣類班全員で国際労働財団を訪問し、対応して下さった職員の皆様より、国際労働財団の活動及び、バングラデシュにおける労働組合の障壁や現状、今後の労働組合の展望や在り方についてのレクチャーを頂戴しました。レクチャーを通じて、国際労働財団の位置付けや労働組合の構造を理解し、衣類産業で働く労働者を取り巻く現状を知ることが出来ました。また、「労使の協力体制こそ労働環境の改善に有効である」と強く仰っており、一般的に競争のイメージが強い企業が開発に対して何ができるかをテーマとするIDYF2017の参加者にとって、「協力」というキーワードは思考を一新し新たなアイデアを生む契機となりました。

<お世話になった方々>

公益財団法人 国際労働財団の皆様

【大豆チーム】

大豆チームは、参宮橋から電車を乗り継ぎ、野田市でのフィールドワークを実施しました。まず、野田自然共生ファームを訪れました。野田自然共生ファーム常務取締役である木全敏夫様よりファーム設立の経緯や現在の活動について発表いただき、質疑応答を行いました。「開発から保全へ」と転換の舵をきり、乱開発にさらされた土地を生物多様性溢れる場所へと回復した取り組みは、参加者にとってとても印象深かったようです。質疑応答では、資金繰りや住民との調整など実現にあたって予想される様々な課題に対する質問が出され、木全様や野田市農政課の平野様と参加者との間で積極的なやりとりが見られました。その後は、周辺を見学させていただき、シンボルであるコウノトリも遠くから見学させていただきました。午後は、堆肥センターおよび直売所を見学しました。堆肥センターでは、剪定した枝を一般家庭や農家から回収し、堆肥にし、再び農家に還元するという循環型農業に参加者たちは感銘を受けたようでした。その後は、直売所「ゆめあぐり野田」を見学させていただきました。新鮮な地のものが集まる直売所は、参加者にとって目新しく、様々な商品を興味深そうに見ていました。また、実際に購入してその新鮮な美味し



さを実感している参加者の姿も見られました。

フィールドワークの後半には、同じく野田市にあるキッコーマン工場のものしりしょうゆ館を訪問し、醤油の歴史や製造法について詳しい説明を受けました。参加者は、資料館のガイドの方に先導を頂き、しょうゆ館を巡りながらキッコーマン醤油の製造法について学びました。ほとんどの参加者にとって醤油は馴染みがあったものの、その原料や製造法まで理解していた者は少なかったようで、興味津々に説明を聞いていました。実際に発酵途中のもろみの匂いを嗅ぎ、麴が生成されていく過程を間近で見た参加者は、現在でも伝統的な製造法を使っていることに驚いているようでした。またアジアからの参加者は、自国の醤油とキッコーマンの醤油との違いにも興味を持っておりました。さらに同しょうゆ館では、醤油がいかに関西の食文化に根付いているかについても学ぶことができ、特に江戸時代から野田市で醤油生産が続いていることに驚いていました。

<お世話になった方々>

株式会社野田自然共生ファーム

常務取締役 木全敏夫様

野田市自然経済推進部農政課

課長補佐 平野健一様

【切り花チーム】

切り花チームは午前中にケニアのバラを直輸入しネット上と店舗にて販売している「アフリカの花屋」を訪問、午後には「アサンテ・サーナ」というフェアトレードストアの見学に赴きました。アフリカの花屋は、ケニアの生産者から質の良いバラを直接輸入して販売することによって、お客様に笑顔や感動を届け、かつケニアに安心できる雇用環境を生み出すというビジネスモデルをとっています。創設者の萩生田愛様にご講演頂いた後、実際に広尾の店舗見学へ足を運びました。

萩生田様の講演は、以下 3 つのパートで構成されていました。

1.アフリカの花屋とは？

はじめに、「アフリカの花屋」のビジネスモデルについて説明をいただきました。ケニアのバラが「長持ち、



大輪、ユニークな模様」といった優れた特徴を持っていることなどをお聞きしました。

2. はじまりの物語

この章では、萩生田さんがアフリカの花屋を開くまで、どのような人生を送り、その中で何を考えて来られたのかをお話しいただきました。人見知りだった子供時代や、模擬国連に参加して世界の抱える貧困問題に気が付いたこと、会社勤めの生活、ケニアでボランティアをして現地の本当のニーズを探したことなど、どこか私たち自身の人生と少し共通した部分を持つ萩生田さんに、参加者は親しみを感じると共に、自らの想いを強く持って事業を始めた萩生田様の姿に刺激を受けたようでした。

3. これから叶えたい夢

最後に、これからも、援助ではなく、ビジネスとして、素敵なバラを日本に届けることによって「お金では買えない心の豊かさ」を日本に届け、「働く喜び」と「安心して学校にいける環境」をケニアに届けていきたいというお話を伺いました。「日本で、気軽にお花をプレゼントするような文化を作りたい」という言葉が印象的でした。

その後の質疑応答の時間では、予定の時間内に収まらないほど活発な質問が飛び交いました。具体的に毎日どの位の規模で輸入販売をしているのか、どのように輸入先を選定したのか、広報はどのようにしたのか等といったビジネスの実用的な質問から、ケニアにおける園芸農場の様子や萩生田様の想いについてまで、様々な質問が参加者から飛び、萩生田様に丁寧にお答えいただきました。ここで得られた萩生田様のご経験やビジネスモデルを実際に活かした解決策を考案した班もありました。

午後はフェアトレード&コミュニティトレードのお店である「アサンテ・サーナ」を訪問しました。アサンテ・サーナは1986年に「地球を元気にするような仕事と暮しを作りたい」という思いから作られた、日本初のフェアトレードストアです。どこで、誰が、どのような思いを込めてその商品を作ったのか。また、ものづくりを通じて何がもたらされたのかといった声が聞こえる、顔が見える関係性を大事にしているお店です。近年は海外とのフェアトレード事業だけではなく、国を超えた地域の問題を解決したいと、国内でも商品開発、問題解決のための取り組みを始めているそうです。例を挙げると、東日本大震災で被災した地域の高校生が製造に携わったお茶の取り扱いによって、被災地域に雇用を生み、かつ、被災しなかった地域の人々に、商品を通して、東北の現状や思いを訴えかけるということが可能です。

多くの製品の説明は日本語で書かれていたのですが、この製品はどういうものなのか英訳を求めてくる場面もありました。また、自らクッキーなどの商品をお土産として購入している参加者もいました。

<お世話になった方々>

AFRIKA ROSE / アフリカの花屋

萩生田愛様

第三世界ショップ直営店

アサンテ・サーナの皆様

<DAY 5> 16th, March

Day 5 の始めには、各グループが全参加者に向けてフィールドワークの報告をする時間を設けました。他の班が経験したことや学んだことに対して興味を持ち、互いに質問し合う姿が見られました。

Day 5 の目的は、Day 4 までに選定・分析した各ケースにおける最も解決すべき問題に対して、解決方法を導き出すことでした。各ケースに関する基本情報の整理や、問題分析が思うように進んでいなかったチームもあり、運営メンバーもそのチームに入って、議論の方向性を共に考える場面もありました。何を優先させるかという点で参加者の意見が食い違った際に、妥協することなく議論をし合っている姿も見られ、国際開発に対する熱い思いを垣間見ることができました。

午後には、異なる 2 つの班をペアにして互いへのフィードバックをする時間を作りました。開発学やビジネスなど各々の専門分野を生かした鋭い質問が投げかけられ、他チームの意見から新たな気づきを多く得た時間となりました。

一日の終わりには、Karaoke Night が開催されました。ディスカッションの真剣な雰囲気から打って変わり、世界中から集まってきた参加者たちが賑やかに楽しむ姿が見られました。



<DAY 6> 17th, March

6 日目は、最終発表を翌日に控え、どの班も熱心にグループワークに勤しんで

いました。午前中は専ら各班に分かれての作業であり、進捗に差こそあれ、どの班も最終プレゼンテーションの精度を上げようと努めていました。まだ解決策の具体化に頭を悩ませている班がある一方、既に前日までに大まかな流れが完成し、パワーポイントやポスターの作成に時間を割いている班も見られました。

昼食後には2人の専門家を迎えてフィードバックセッションを行いました。お越しいただいた専門家の1人目は、農業地理学・農業経済学がご専門で、15日に行ったフィールドワークについてもご助言を頂いた、今野絵奈先生です。もう一方は、複数のコンサルティング会社で勤務経験があり、労働問題に詳しいPohl先生です。今野先生には大豆グループ2班と切り花グループ2班の合計4班、Pohl先生には衣類グループ2班へのフィードバックをお願いし、それぞれのグループが先生方の前で発表を行ったあと様々なアドバイスを頂きました。大豆・切り花グループのフィードバックでは、多くの班が小農・アグリビジネス・政府の間の協力や、小農間・ビジネス間の協力を提言していたところに、これらアクター間の協力の難しさを現場の知見をもとにご指摘いただきました。Pohl先生からは、プレゼンを作成するにあたり、どのようにすれば企業にも政府にも訴えかけられるプレゼンになるのかといったアドバイスを頂きました。この他にも、今野先生、Pohl先生共に各班の議論に多くの質問を投げかけ、参加者と運営メンバーだけでは想像もつかなかった論点も多くご指摘いただきました。参加者も、専門家からのインプットを受け、残り少ない時間の中でさらにプレゼンテーションに磨きをかけていました。



また休憩時間には、大豆チームがフィールドワークで頂いた大豆を使って調理した料理も楽しみました。

<フィードバックセッションでお世話になった方々>

公益社団法人中央畜産会

経営支援部（支援・調査）

今野絵奈様

Staufen AG（株式会社 シュタウフェン）

ビジネスマネジメントコンサルタント

Martin Pohl 様

<DAY 7> 18th, March

Day7 は最終報告会の日でした。午前中はオリンピックセンターでリハーサルを行い、各班、プレゼンテーション内容を簡潔に説明する練習をしました。中には夜中までかけてプレゼンテーションの準備をしたり、出発間際までプレゼンテーションの調整をしたりしている参加者もあり、最終報告会に向けての彼らの意気込みが感じられました。

最終報告会では各班 15 分でプレゼンテーションを行い、10 分で 2 名の審査員からの質問に答えました。審査員は民間企業の方 1 名、政府系機関の方 1 名をお招きし、「企業×開発」というディスカッションテーマに沿った審査をできるように工夫しました。3 つのケーススタディ、計 6 つの班のプレゼンテーションは、「的確に問題分析ができているか」「新規性があるか」「持続可能性が保障されているか」「実現可能性が考慮されているか」「インパクトのある解決策であるか」の 5 つの基準を基に審査され、1 位と 2 位を決定する形式で実施されました。どの班も、フォーラムを通して議論した内容を分かりやすく審査員に説明する工夫をしておりました。特に印象的であったのは、実際に解決策としてあげていたホームページ作成を既に行っており、完成形に限りなく近いホームページを発表していた班のプレゼンテーションでした。また、質疑応答の時間では、自分たちの議論の集大成をより正確に伝えるべく、多くの参加者が熱心に審査員からの質問に答えておりました。結果、1 位はバングラデシュ衣類産業の班で、女性の健康問題をバングラデシュの衣類産業における根本的な課題と考察し、企業による、企業配属の看護師の訓練を解決策として提案していました。2 位はブラジルの大豆産業の班で、土地収奪をブラジルの大豆産業の根本的な課題とし、零細農家を主なターゲットとした農業組合作りを解決策として提案していました。審査員の方々から、テーマや内容にかなり多様性のあるプレゼンテーションであるため、優秀なプレゼンテーションを選定することは非常に難しく、順位付けの有無を考え直しても良いのではないかと助言をいただきました。こちらは次年度以降の反省として検討していきます。

結果発表が行われた後、各審査員の方から各ケーススタディに対するフィードバックの時間を 15 分ずつ設け、全体総括を頂きました。その中で審査員の方からは、「解決策を考える際、対象等の詳細については広げたり縮めたりして考えると良い」、「問題にアプローチするアクターの特徴を捉え、アプローチ方法も体系的に考えると良い」、「実現可能性を考えながらも、本当にその解決策は根本的な解決に繋がるのかと考えると良い」、「ぜひチェンジメーカーになって実際に行動をしてほしい」というような有意義なコメントを頂きました。プレゼンテーションが終わってもなお、考え続ける、学び続ける環境を参加者に提供できたのは、IDYF2017 の大きな特徴なのではないかと考えます。

このようにして Day7 は終了しましたが、改めて IDYF は多くの方に支えられているということを実感しました。

<最終発表会にて審査員としてお世話になった方々>

独立行政法人国際協力機構

南アジア部南アジア第二課課長

根本直幸様

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社

新事業開発室副長 / Center on Global Health Architecture

小柴巖和様



<DAY 8> 19th, March

最終報告会翌日に東京近郊を観光するオプションツアーを開催しました。会期中のチームの枠や「参加者」「スタッフ」という枠を越えて楽しい時間を過ごしました。

まずは浅草に移動し、一つのグループは江戸切子の体験をしました。好きなグラスを選び、模様を自分で入れていくという体験です。下絵も自分で描き入れるため、なかには自分の名前や、某世界的企業のロゴを入れるなどの独創的なデザインも登場しました。模様入れでは皆の表情が真剣そのものでしたが、完成後は世界に1つだけのオリジナルグ

ラスを手に笑顔を見せていました。もう 1 つのグループは食品サンプル体験をしました。天麩羅やキャベツの食品サンプルを作成する体験は、日本人スタッフにとっても新鮮だったようです。仲見世通りを散策して目当ての土産物を購入したあとは東京大学へ。閉店間際の売店に滑り込んだあとはグッズを購入しました。



フォーラム期間中は、なかなか観光の時間は取れなかったため、参加者たちはオプションツアーを非常に楽しんでくれました。会議では真剣に、時に熱く議論することもありましたが、この日は穏やかでのんびりとした時間を過ごし、参加者と運営の垣根なく楽しむことができました。

第4章 各チーム紹介

Fantastic Beans (Soybean team)



本チームは、議論の初日からきばきと議論を進め、議論を初めて数時間後には問題点を特定するチャートを完成させておりました。その理由の一つには、農業ビジネスを専門とするウクライナの研究者がチームの中にいたことがあります。彼は専門的な知見を生かし、チームがより早くブラジル的大豆産業の概要をつかむことに貢献していました。その他にも、議論に慣れている参加者が集まったことも議論の成功理由のひとつでした。例えば、イギリスの修士課程で開発学を学んでいる日本人女性は皆のアイデアをまとめることにいつも貢献し、ディベートの経験のあるオーストラリアの学生はたくさんの新しいアイデアを出し、様々な学生会議に参加した経験のある UAE の参加者は説得力のあるプレゼンテーションを行いました。議論が得意なメンバーがいる一方で、当初はあまり発言ができないメンバーも見受けられました。しかし、別のメンバーが発言をするように促す様子も頻繁に見られ、議論が進むにつれ、彼ら（彼女ら）も積極的に議論に貢献するようになりました。

またフィールドワークで訪問した野田市でも、野田市農政課の方にたくさんの質問を投げかけておりました。特に、野田市の環境保全を重視した取り組みと、自国やブラジルの農業政策との比較に興味を持っていたようでした。また、専門家からのフィードバックを頂いた際には、チームが描いていた理想と現実のギャップを指摘されました。本チームは農民と企業と政府など各アクター間の協力を行う枠組みを提案しておりましたが、畜産業をご専門にされている今野先生から、そもそも農民同士の協力が難しいことを指摘

されました。その後短い議論の時間でも、専門家からのフィードバックを十分に最終報告に組み込み、最終発表では全チーム中 2 番目の成績を収めました。

TOFU Fighters (Soybean Team)



このチームは、IDYF の多様性を象徴するような様々な背景を持つ参加者が集まりました。初めて海外へ来るイギリス人女子学生から、アルゼンチンで法律家をしている者、日本で研究をしているロシア人女性など多様なメンバーが集まりました。それゆえ、個の力を重視しつつ、議論の場では納得するまで議論しているように見受けられました。一人一人がリサーチをした結果を報告し合い、どういった提案ができるのか時間をかけながら着実に合意を積み上げる形で解決策を模索していました。それぞれが法律や、IT、国際関係など自分の強みを生かしつつ、チームで1つのものを作り上げる過程は目を見張るものがありました。

また、フィールドワークの機会も積極的に活用し、これまでの調査を踏まえて仮説を用意し、訪問先の方との議論に生かしていました。また、小規模な農家でも有機農業で勝ち残ることができるという点や農業組合を組織するというアイデアは、解決策を考える過程で役立つようでした。

何と云ってもこのチームの特徴は、非常に深く問題分析を行っていた点です。写真の背景にある白板にびっしりと書かれた文字が物語るように、「Why?」を繰り返し、文献を読み込む姿はスタッフ一同、関心しておりました。このチームは、6 チーム中唯一奨学金参加者がおりませんでした。その点を吹き飛ばすかのような徹底的なリサーチと発表の論理構成は見事でした。最終報告会でも、審査員の方から深い問題分析についてお褒めの言葉をいただきました。

KAIZEN (Garment Team)

チーム KAIZEN は、バングラデシュの衣類産業の問題分析を深くしつつ、「実現可能性×インパクト」という観点から、解決策を考案をしていました。バングラデシュの衣類産業には様々な課題が存在しますが、この班は「女性の健康問題」に着目をしました。なぜなら、バングラデシュの衣類産業従事者のうち約 8 割は女性であり、そのうちの約 6 割は筋骨格障害という障害を抱えており、ここにアプローチをすると、バングラデシュの衣類産業に大きな影響を与えられると考えたからです。解決策も企業が低コストでできる看護師訓練を考案し、地に足の着いた議論が繰り広げられていました。この班には、奨学生としてバングラデシュの衣類産業で女性の月経への無配慮の問題を解決するプロジェクトを実施した人が所属していましたが、健康問題に関する知識だけでなく、実際にプロジェクトを実施するノウハウ等も提供しており、現地の文脈に沿った議論ができておりました。

Green Stitch (Garment Team)

この班は、問題分析において何が「真の根本」であるかを追及することに重きをおき、バングラデシュの衣類産業をマクロな視点から分析し、社会制度の変革を目指した解決策を提案しました。全員が積極的に発言をする雰囲気を大切に、円滑な議論を行っていました。彼らは「児童労働」をバングラデシュの根本的な課題としましたが、これは「教育はあらゆる問題の根本にある」と考えるメンバーが多く、班のメンバー全員で「教育の重要性」という軸を持ちながら課題分析をした結果であると考えます。そして、この班には奨学生としてバングラデシュの大学で講師をしている方が所属しており、現地の人ならではの文化的な事情や、地方の社会制度等に関する情報を提供し、バングラデシュの事情を考慮した議論が進められていました。

Blossom Gs (Cut flower Team)



このチームは、ボリビア、ドイツ、モルドバ、ルーマニア、ケニア、日本からの参加者で構成され、多種多様なバックグラウンドを持つ人々が集まったグループでした。ケニアで開発プロジェクトに参加した経験を持つメンバーを筆頭に、一人ひとりが自分の意見を出し合いながら一日目から、緻密な問題分析を進めていきました。意見が割れると、「なぜそう思うのか。」ということを徹底的に話し合い、全員が納得のできる意見が出るまで議論ができたのは、この班の特徴でした。また、情報工学を専攻する参加者がいたため、最終発表会では解決策として考案したビジネスのウェブページを実際に公開し、会場を沸かせました。常に笑顔を絶やさず、活気にあふれた議論を通して、個性を活かしたプレゼンテーションができたチームでした。

Cutting Edge Flowers(Cut flower Team)

このチームは、ウガンダ、リトアニア、フランス、ロシア、ヨルダン、カメルーン、日本からの参加者で構成され、1週間のフォーラムを通じて最も成長したチームの1つです。このチームは、ユース会議出場経験が豊富な者もいれば、初めて海外に来た者もあり、当初は全員で議論し、意見をすり合わせるのが難しいと感じる時もありました。途中で運営も加わり、「全員の意見を尊重し最後まで聞いてから発言すること、全員の共通認識を確認しながら少しずつ合意を積み上げていくこと」などのアドバイスも行いました。その結果、フォーラム 3 日目以降は、当初はなかなか意見を言えなかったメンバーも自信を持って発言できるようになり、これまでやや議論を独占気味だった参加者も他の参加者の発言を促進するなど、チーム全体で良い雰囲気になりました。フィールドワークにおいても、社会起業家である萩生田様と積極的に意見交換を行い、解決策考案のヒントを得ておりました。最終的に、メンバー全員で議論し、非常に論理的で分かりやすい発表を行うことができました。

第5章 各チーム最終発表概要

この章では、各班が最終日に発表した提案要旨の和訳を以下に掲載致します。

< Fantastic Beans >

小農の土地が法外な値段で奪い取られ売買されるという土地収奪の問題は今日の重要な課題である。現在外国の大企業が、様々な理由から農地を維持できないブラジルの小規模農家から土地を買い上げている。ここで重要な点は、外国企業は、大規模の土地を得てより多くの大豆を生産することで利益を最大化するために行動しているということである。

私達の提案するモデルは、「ソイ・ティック」というイニシアチブによって運営される。これは JCCI と BCCJ の下で協働、活動し、(1) 国際基準の品質 (2) 反土地収奪 (3) 安全性の 3 つを保証するラベルを発行する権限を持つ。この保証ラベルは、一定の基準を保証するためブラジル企業に販売される。保証ラベルから得られる収入はパラナ地区の小農のための職業訓練、特に安全な生産方法の訓練に使われる。この仕組みは、ラベル獲得のために上記の基準を満たそうとする大企業の小農への投資を促すことで、土地収奪の問題解決に貢献できる。

このような、主要な主体間の協力・協働を促すものは、現在のトレンドにも合致し、他の先進国・途上国での成功例もある。このモデルのユニークな点は、企業が大豆生産を通してブラジルの社会的な変化に貢献できるという点にある。具体的には、以下の点で企業はブラジルの持続可能な農業の実現に貢献する。

- (1) 人的資源：様々な主体のスキル、知識、能力
- (2) 金融資源：マイクロファイナンスや PRONAF (ブラジルの家族農業支援プロジェクト) を活用した資本
- (3) 物理的資源：新しい技術、新しい種子、新しい機械等
- (4) 社会的資源：主体間の相互依存関係、信頼等に基づく社会的ネットワーク
- (5) 天然資源：ブラジルの肥沃な土壌に代表される土地資源

最後に、私達の提案する試験的プロジェクトは、土地収奪に対する実行可能かつ根本的な解決策であると考えている。特に、土地収奪の原因としてこれまで捉えられてきた企業が社会課題解決に貢献できる点において、本提案は意義があるものと考えている。

< TOFU fighters >

ブラジル、セラード地方での大豆産業における最大の問題は、「土地収奪」である。私たちの提案は、自分の土地を追われそうな弱い立場にある農民に必要な情報を与えると同時に、関係者間での連携を深め、生産組合を組織することである。この要約では、①ブラジルのアグリビジネスの概要、②セラード地方における土地収奪問題、③ソーシャルビジネスとなりうるビジネスモデルの提案という3点に分けて説明していきたい。

数十年の集中的な開発計画を経て、ブラジルは今や世界第2位の大豆生産国となった。この驚くべき成長の重要な要因となったのは、セラード地方でのアグリビジネスによる大規模、機械化農業の拡大であり、セラード地方での大豆生産は、ブラジル国内の70%以上を占める。しかし、同時にセラード地方はアマゾンに次ぐ自然豊かな地域でもあり、世界最大級のサバンナも有する。しかし農薬の使用と単一作物栽培により、セラード地方では野生生物の生育環境の破壊と森林破壊が発生した。また、土地収奪により地元の農民たちの多くが生活の糧を失い、土地を追われた。

土地収奪は2つの方法がある。第一にアグリビジネスでは通常、「仲介人」を通じて土地を不正取得し、不動産として売却し利益を得る。セラードでは地域の協力体制が構築されておらず、こうした土地収奪に対抗する術を持っていない。第2に、土地収奪は土地の所有権に対する海外からの投資と密接に関わっており、2007年—2008年にかけて発生した食糧危機を契機に、海外投資家にとってブラジルの土地所有権は格好の投資先となっている。ブラジル政府は、海外資本による土地所有制限を撤廃する方針を明らかにしており、土地収奪による環境破壊・人権侵害を防ぐための方策が必要である。

そこで私たちの班は、オンラインプラットフォームを構築し、土地収奪の危機にさらされている農民へ必要な情報を提供する、農民たちを法的・技術的サービス提供者と交流させる、持続可能かつ小規模な農業を促進するための開発・環境関係者と連携することを提案する。ホームページのほかホットラインを用意することで幅広く農民のアクセスを確保し、農民たちは必要な情報を得ることで、農業経営の選択肢を増やすことができる。資金面では、ホームページの広告収入のほか、大企業のCSR部門や持続可能な食糧生産に関心ある外国政府と連携して資金集めをしていく。

以上の方法を通じて、農民自身の連携を強化し、農業技術向上につながる農業生産組合を組織することができるだろう。

< KAIZEN >

Bangladesh の衣類工場での劣悪な労働環境は、工場内の女性労働者に多くの健康問題を引き起こしている。当グループは特に労働に関する筋骨格障害(WMSDs)に焦点を当てている。WMSDs は長時間同じ姿勢で働くことによって起こり、一般的に筋肉や腱、神経の痛みを伴う不能障害である。筋骨格システムの障害は、労働で引き起こされる病気のなかでも最も多くを占めるものだ。長時間誤った姿勢で作業をすると、この障害が進んでしまう。 Bangladesh の衣類産業に従事する多くの労働者は筋骨格障害を患っており、首、肩、腰、上肢、歩行器官の筋骨格障害は、労働者のみならず、研究者、企業からも高い関心が寄せられている病気の一つである。なぜなら、WMSDs は一時的もしくは恒久的な障害であり、痛みや痺れ、刺痛のような症状を引き起こし、労働生産性を低下させると同時に労働者の治療費を増加させるためである。以上により、当グループは、 Bangladesh の衣類産業における根本的な問題を、工場内の女性労働者に起こっている健康問題、さらには WMSD と考えた。

調査と衣類産業間の比較ののち、女性労働者(労働者全体の 85%)に影響する労働関係の健康問題は非常に重要な問題であると結論付けた。WMSDs に焦点を当てる当グループの選択はその流行を考慮に入れた。60%以上の女性労働者が WMSDs を患っていると。さらにはクライテリアの項目である実現可能性、持続性、可制御性、重要性をもちいながら、当グループは女性労働者の労働関係の健康問題、特に WMSD は軽減されうる最も適した問題である。したがって当グループはこの問題の解決策を考えた。

当グループの提案は、 Bangladesh の衣類産業における女性労働者に長期的、段階的な WMSD の予防策を提供することである。このサービスは衣類工場の看護師が日々のスケジュールの一部として女性労働者にストレッチ運動を提供するものである。当グループは専門家による訓練を行うため、HERproject(Bangladesh の衣類産業やサプライチェーンにおける女性のエンパワーメントのための NGO)や他の関連機関と連携する。長期的には、このサービスの持続性を確保するため、 Bangladesh の看護師過程において訓練の一部として組み込まれることが期待される。さらには、JICA、および民間企業であるファーストリテイリングやマザーハウスといった企業との連携も可能であると考えている。

< Green Stitch >

バングラデシュの衣類産業には児童労や環境問題、労働環境等の様々な課題が存在する。当グループは、バングラデシュの衣類産業の課題を5つの段階で分析した。まず、諸課題の洗い出しを行い、各諸課題の原因を探る形で4段階に分けて原因分析を行った。この作業の中で、バングラデシュの衣類産業の表面的な課題は、教育の重要性が社会全体に周知されていないことに起因すると考える。

バングラデシュの衣類産業の課題を解決する根本的な方法は、児童労働を減少させながら教育を普及させるという方法である。バングラデシュ政府はもうすでにアジア開発銀行や世界銀行グループと協力をして、教育補助金の提供を行っている。しかし、彼らが教育補助金としてもらえる額と、実際に働いて稼ぐ額には25倍以上の差があるため、教育補助金は実質的には機能していない。よって、バングラデシュの衣類産業の課題を解決するには、民間企業と協力をしながら、教育補助金の増額をさせる必要がある。教育助成金を拡大させる具体的な方法は、民間企業に減税というインセンティブを提供しながら、CSR 予算の5%をバングラデシュの教育補助金に充当してもらうという方法であり、以下に詳細を記す。

1. 直接投資をしている外資企業に関しては、法人税の減税率を5年後ごとに100%、75%、50%と設定し、外資企業数の増加を目指す。減税により減少した政府の歳入は、これらの企業で働く人々の所得税で補う。

2. 小売店に関しては、地場企業と下請け契約の締結をしてもらい、その収入の5%をCSR 予算に充当してもらう。インセンティブとして、付加価値税税率を5年間、15%から9%に引き下げる。

3. 地場企業に関しては、そこで働く子ども達を学校に通わせる代わりに、所得税率を20%から30%に引き下げる。子どもが学校に通うことにより不足した労働力は、失業しているもののスキルのある労働者によって補填される。また、地場企業は必然的に労働者の労働環境を整える。なぜなら、周りに労働環境の整った外資企業が多く集まっているため、整備をしなければ労働者獲得競争に負けてしまうからである。

この解決策は働いている子ども達、政府、企業の三者に利益が生じることから、実現可能性が高いと考えている。

< Blossom Gs >

切り花産業は、年 17%もの勢いで最も急速な成長を遂げているケニアの産業である。ケニアの全輸出の 16%、農業輸出品の 40%を占めており、50,000 人の雇用を生み出し、関連産業にも 500,000 人の雇用創出をしている。4400 万人の総人口のうち、200 万人がこの産業に関わっている。

このように大きな産業は様々な問題に直面しない訳がなく、切り花産業もその例外ではない。私たちはいくつかの重要性の高い問題を、環境問題、不適切な労働環境、そして経済的リスクの高まりであると特定した。

生産において、不適切な化学物質を含む水を大量に排出するため、周辺地域の水資源を汚染してきた。貿易協定に参加していないことや関係機関での汚職によって、不平等な賃金や女性の権利侵害などを招く、不適切な労働環境や労働者の権利保障の甘さが問題になっている。欧州市場への依存性が高いこと、食糧生産よりも花卉生産を優先すること、そして小農家は限られた資源しか持っていないことが、農家の経済的なリスクを高めている。

私たちは、それらの問題の深刻さ、重要さ、そして問題解決の実現可能性を基準に、小農家の資源不足と市場の多様性の低さを、社会的投資を通して私たちがアプローチできる課題だと特定した。そして、私たちはケニアの小農家組合を東アジアと東南アジアの市場へとつなげるオンラインプラットフォーム、Blossom.Gs を考案した。

初期段階では、市場での安定的な供給を確保するため、すでに存在する組合を改善し、新規加入者の獲得に集中する。同時に、世界中の投資家にこの多様なポートフォリオを PR し、海外からの投資をひきつける。そして市場の準備ができた段階で、そのプラットフォームは外国の投資家の需要とケニアの小農家組合と供給をつなぐオンラインサービスを開始する。

適切な労働条件の保障と環境管理を実施する生産者に特権を与えることが、上記の問題の改善と消費者側の意識の向上につながると期待している。一方で、小農家の組合を、価値の高い市場とつなげることで、供給者側の資源へのアクセスが容易になることが期待され、経済的なリスクも緩和される。それに加えこの解決策は、関係者の費用削減、効率の向上、価格の安定など、多くの他の問題に対する利点もある。

< Cutting Edge Flowers >

ケニアの切り花産業は、環境・経済・社会という面で様々な問題に直面している。私たち Cutting Edge Flowers チームは、その中でも有害物質による土壌・水質汚染問題に焦点を当て、農家の環境に対する意識の低さと行政規制の未発達を根本的な問題だと考えた。一度引き起こしてしまった環境汚染は元に戻すことが難しく、環境問題は切り花産業の安定性をおびやかす危険性もある。

そこで、私たちは環境に優しい肥料を生産する会社への税の軽減と、農家の環境問題への意識を高める EIA（環境に対する影響評価）制度を導入するという解決策を提案する。これらの政策の相互作用によって、新たな海外直接投資を呼び込むことによってだけでなく、税制優遇措置や環境に優しい肥料の低価格化を通して、ケニアの経済発展を促進させるだろう。また、花の栽培における有害化学肥料の利用を規制する EU（欧州連合）の法律がより厳しくなると予想されているため、これらの提案はケニアの花農園の存続のために不可欠であると信じている。

まず、この EU の貿易規制変化に対応するため、ケニア花卉協会(KFC)は、環境に優しい肥料の使用についてのアドバイスを農家に無料で提供し、そしてその肥料を利用することによる長期的な利点を創出する仕組みを確立するべきである。また、環境に優しい肥料生産を促進するためには、生産業者に対する税の引き下げを導入することが効果的だろう。これらの策は、ケニアの花農園の環境問題に短期的にも長期的にも良い影響を与え、持続可能な変化につながるはずだ。

第6章 参加者からの声

参加者アンケート結果

参加者アンケートより

IDYF の魅力、改善点、学んだことなどについて参加者にアンケートを行いました。その結果の一部を以下に抜粋します。

よかった点

- ・ フィールドスタディーが企画されていた点
- ・ 現代の問題について様々な意見を聞くことができた点
- ・ トピックの選定、マネジメントがうまくいっていた点
- ・ 運営者がエネルギーに若い人たちをまとめていたところ
- ・ ソーシャルイベントが楽しかった点
- ・ イベントのおかげで友達が増えた点
- ・ ストレスフルな作業の後にイベントを楽しむことができた点
- ・ 国を比較して考えることができた点
- ・ 様々な文化的背景の人と関わった点

改善点・提案

- ・ 事前に参加者同士のつながりを作る
- ・ 開発学とは何かについて議論するより、チーム内のディスカッションに時間を使う
- ・ ファシリテーターを各チームにつける
- ・ オリンピックセンターの外でイベント開催する
- ・ もっとイベントで日本の文化について学べる機会を作る
- ・ カルチャルパーティーの持ち物をより詳しく説明する
- ・ 自由時間を増やす
- ・ それぞれのチーム間での関わりを増やす

学んだ点

- ・ それぞれのディスカッションテーマについて詳しくなった

- ・ 開発学の大切さを学んだ
- ・ 自己主張をするだけでなく、他のメンバーと協力することを学んだ
- ・ 思考力がついた
- ・ 他の意見を受け入れる重要性に気がついた
- ・ 知らない国について詳しくなった
- ・ 異なる考えを持った人と意見を交わす大変さに気がついた
- ・ 細かい点を気にすることが大切だと学んだ
- ・ もっと詳しくディスカッションテーマについて調べたいと思っ

参加者からの感想

参加者数名から、IDYF での経験を感想文として寄せて頂きました。以下、運営メンバーによる和訳を掲載しております。

- ・ **Dmytro Kyryliuk(大豆班)**

私は、農業経済学の博士号を取り、現在は National University of Life and Environmental Sciences の上級講師を務めています。奨学金生として IDYF2017 に参加しました。

はじめに、創設者のひとりである宇佐美紘一氏と共同代表である田原早耶香氏、斉藤美沙季氏、そしてこのプロジェクトを支えてくれたすべての人に感謝申し上げます。

2017年のプロジェクトではバングラデシュの衣類産業、ブラジルにおける大豆産業、ケニアにおける切り花産業を対象にしました。取り上げられたテーマは大変重要なものであり、それらについて考えることは3000人の応募者にとって非常に有意義であったといえるでしょう。このフォーラムの強みは、世界中から参加者が1つの場所に集まり、世界が抱える問題に対する彼らの考えを共有することにあります。



“Travel is more than the seeing of sights; it is a change that goes on, deep and permanent, in the ideas of living.

(旅をするということは風景を見る以上の意味がある。それは生き方を考える中で深く永続的に続く変化のことである。) ”—Miriam Beard

IDYF は若者たちに、考えや知識、物事の見方の共有と同時に、知識を吸収し、新しい領域を開拓し、新しい

考え方を見つける機会を与えています。異なる文化や、世界中の人々と意思疎通をとり、協力するための方法を知ることは、将来の成長のために大切です。

“A journey is best measured in friends, rather than miles. (旅というものは距離で価値を計るのではなく、友人で計るのだ。)” – Tim Cahill

知識や考えの共有だけではなく、IDYF は新しい友人と出会う機会をも提供してくれます。これも将来の成長のために大切です。なぜなら、友人は自らが大変な時に手を差し伸べてくれる存在であり、また、国や社会に変化をもたらすための新しい考えやモチベーションを与えてくれるからです。

端的に申し上げますと、このフォーラムの成果は、世界中から集まった参加者がそれぞれの経験をもとに、新しい解決策を考えたり、考えを共有したりしたという点で大変「実用的」でかつ、世界中から集まった人々が互いの異なる文化を、特に日本文化を理解し合い、得た知識を持ち帰り、社会や国のために活用するという点で「文化的」なものがあったということです。

IDYF 参加のための支援に大変感謝しております。小さな変化はいつか世界に大きな変化を生むことになるでしょう。

・ Arjun Sapkota(大豆班)

この経験は、私にとって新たな世界を広げてくれるものであり、「開発」の意味について深い洞察を得ることができました。また、世界中から多様な背景を持って集まった参加者達と一生ものの友情を築くことができました。フォーラム中の議論、フィールドワークに私は大いに感銘を受けました。私はネパールの若い活動家であり、ネパール人の農家と政策決定者に、私が日本で感銘を受けた持続可能な農法を提案したいと思います。その農法は、ネパール社会の持続可能な開発に資するものであると考えます。



私はこのフォーラムを海外で開催することを提案したいと思います。そうすれば、IDYF の活動の輪をさらに広げることができるでしょう。

ありがとう！

・ Iftekhar UI Karim(衣類班)

私は、様々なノウハウやベスト・プラクティスの共有を通し、バングラデシュの衣類産業に関連する開発のアジェンダを、グローバルな規模で見直したいと考え、IDYFに参加しました。私は研究者であります、特にラナプラザ倒壊後、バングラデシュの衣類産業の社会的持続性に関する研究は、年々重要度を増していると考えます。私自身、IDYFでの議論を進めていくために貢献できたと考えていますが、同時に、社会・政府・民間企業の強い連携が地域の開発ないし世界の開発をもたらすと学びました。官民連携を通し、企業がより高度で効果的な開発の概念や、社会・経済・環境・政治・法律などの分野に対するアプローチを高められるということも学びました。CSRや持続可能な開発アジェンダを背景に、多面的な連携アジェンダやプロジェクト・スキームを通し、いかなる規模の企業も、責任あるビジネスと企業指針を策定できるということも明らかになりました。

今後の話にはなりますが、私は国際協力機構や国際労働財団と協力し、実際に考えた解決策を実現させたいと思います。最終プレゼンテーションでも申しましたが、バングラデシュの衣類産業の課題を根本的に解決するためには、教育へのアクセスを拡大することによって、児童労働を撲滅させることが必要です。バングラデシュには、Primary Education Stipend Programme(PESP)と呼ばれる教育補助金制度が存在し、毎月小学校に通う児童に2.5ドルを給付しています。一見このプログラムは教育へのアクセス拡大に貢献



しているように見えるかもしれませんが、しかし、これらの子どもが1ヶ月働けば60ドル稼ぐことができるため、両親にとっては子どもを学校に通わせるより働かせたほうが魅力的であり、この制度は実質的には機能していません。よって、バングラデシュの衣類産業に関わる子ども達のための教育補助金の拡大は必要不可欠です。しかし、バングラデシュは途上国であるため、自国のみで上記のことを成し遂げられません。そこで国際協力機構や国際労働財団の協力が必要なのだと考えております。

- ・ Alinery Lianhlawng (衣類班)



共通の問題意識を抱く若者が 45 カ国以上から集まり、より良い未来の為に企業が発展を目指す方法を議論した事で多くの教訓と記憶に残る経験を得る事ができました。フォーラムは、5名の奨学生の中の1人として、議論の根本的な問題の分析を提示する事から始まりました。そして、この問題に取り組む最善の解決策を練る為にその後、6つの班に分かれました。私が国際開発ユースフォーラムから得た2つの重要な学びとして、永遠に持続するネットワークの構築と共感が挙げられます。フォーラムを通じて私は、6つの国々から来た情熱的なチームメイトと出会い、一生涯の深い友情を育めた事に感謝しております。問題に対する参加者の誠実さと理解度は非常に高く、それぞれの議論は私たち1人1人に大きな影響を与えました。フォーラムを通じて、私たちは問題を真に理解し、他の問題を議論するグループと意見交換をすることができました。そのため、目標が明確であり要点が適切であったこと、そして学生により運営されていることで余計なしがらみが無く、参加者が実力を最も発揮できる場であったことが、国際開発ユースフォーラムの最大の魅力であると考えています。

私はフォーラムを通じて、自分のアイデアが実際に実現するという確信を得ることができました。フォーラムの内外で素晴らしい参加者たちと実践的な会話を通じ、私は自分のコミュニティに変化を持ち帰るといふ、情熱を追求する強さと自信をもらいました。

私たちのグループはバングラデシュの衣類産業についての最終発表で優勝しただけに留まらず、帰国後世界中の離れた所から発表した内容を現実にしようと取り組んでおります。実際に、私とポーランドのチームメイトであるクルアディアは、私のコミュニティであるインドのサンガウの建設事業に資金援助をする **Wedu Rising Star Special Project** に取り組んでいます。この恵まれない辺地で育った私は、教科書や小説は勿論のこと、学習帳やノートさえ購入することが困難でした。現在においても、地元の学生は兄弟や親戚の使い古しの本を用いています。将来学生が基礎教育へのアクセスや貧困に苦しみ続けることを阻止する為にも、生徒が学び、成長し、発展するために必要な図書館を設置したいと私たちは思っています。

国際開発ユースフォーラムで得た経験と人との繋がりは、私に大きな影響を与えるだけではなく、問題解決を通じて誰かにとって昨日よりも良い未来を創り出す力を生み出すものであると信じています。

・ Alejandro Urioste Daza(切り花班)

奨学生としてIDYF2017に参加できたことは、私の短い職業生活の中で最も実りある成果の一つでした。そのおかげで私は、全額支援をいただきフォーラムに参加するという事実以上の経験をすることができました。なぜなら、このイベントを通じて、私は国際開発に関する価値ある知識を得ると同時に、優秀な若者達との友情を気付くことができたからです。

このIDYF2017は一生に一度の経験でした。その特徴は、行動内容や提案内容に関して参加者に大きな裁量を与えている点であり、私は参加者として多くのことを学べたと感じております。専門家からの集中講義を聞くのではなく、参加者間で経験を共有し協働することで、私たちは最も創造的な解決策を生み出すことができました。

参加者それぞれが活動の中で妥協や熱意を示していました。参加者の選考基準は、寛容で若い起業家気質という点で調和がとれており、そのおかげでこのフォーラムでの最も価値ある成果であるネットワーク構築につながりました。閉会式では、自分たちの考案した事業を継続していこうという前向きさが参加者間で共有されるようになっていました。初日には優しく握手する程度だった関係が、別れの挨拶をするときには暖かいハグに変わっていました。1週間の経験を終え、家に持ち帰るカバンには様々なチャンスと人々との出会いにあふれていました。私は、将来参加者が再び集まり、素晴らしいプロジェクトを共に成し遂げることができると信じています。

真剣な議論と様々なソーシャルイベントとの時間配分も絶妙であり、公私ともに良好な人間関係を築くことができました。また、ソーシャルイベントにはゲストのおもてなしや優しさを基調とする日本文化の特徴を知る機会も含まれていました。また、今回の議論テーマであるケニアのバラを扱う企業訪問を通じて、私たちは解決策策定へのヒントを得ることができました。

フォーラム後、私たちのチームでは、自分たちの提案をさらに精査し、他の会議でも応用していこうと計画しています。審査員のお二人からいただいたフィードバックを通じて、私たちのチームはプロジェクトに取り組む意欲を強めました。努力と創造性を加え、私たちの提案が形になることを信じています。



参加者、そして奨学生として、フォーラムの影響は私たちが共にした1週間以上のものになると強く信じています。短期的には投資のリターンは得られないかもしれませんが、このフォーラムで構築されたネットワークの大きなリターンは必ずやってくるでしょう。変化の激しいこの世の中では、人々のつながりこそどんな職業人生においても最も価値ある財産であると思います。

・ Benon Kwikiriza (切り花班)

IDYF2017 運営委員会の皆様にご挨拶申し上げます。私は IDYF2017 に出席する機会を頂けたことに心から感謝しています。応募書類を審査し、面接を行い、そして私をフォーラムの奨学金参加者として招聘するため多大な時間と労力をかけて頂いたことに感銘を受けました。フォーラムは私の期待をはるかに超えるものであり、多くのことを学んだことを嬉しく思います。私はこのフォーラムでの経験が記憶の中に永遠に残り、そして人生を変えるものであったことを再確認せずにはおれません。

私が解決策設計の段階で熱い議論に参加したとき、私は多様な文化背景を持つ若者と交流しました。貴重で重要な教訓の 1 つは、参加者それぞれの意見を高く評価することが重要であるということです。私は、価値観、イデオロギー、思考が、私たちの生まれ育った文化や経験に大きく影響されていることを学びました。もう 1 つの重要な要素は、私が全世界に広がる友人の強いネットワークを構築することができたということです。会議のわずか 1 週間後、多くの参加者から、更なる人生の転機となるような機会や会議に関する知らせを受けました。彼らは私の人生にこれからも様々な影響を与えてくれるでしょう。IDYF は私の人生における様々な機会への扉を開いてくれました。私は感謝の気持ちをこれからも忘れません。

日本での滞在中、私は日本人のユーモア、謙虚さ、優しさに魅了されました。その素晴らしい経験を、私は母国で家族や友人に共有しました。私がフォーラム中に得た出会いと考え方の変化は、ウガンダの仲間たちが未だ経験していないものです。列車、エレベーター、地下鉄、自動販売機などの最先端テクノロジーを使用することは、価値のある体験でした。

私は大学でキャリアガイダンスとスピーチワークショップを開催しており、IDYF の参加者 2 名を招待するなどして、会議の成果を幅広く紹介しようと考えています。私は、大学図書館向けに詳細なレポートを執筆



して、私の同僚の多くに IDYF の活動を紹介したり、ソーシャルメディアのプラットフォームにおいて活発に情報共有したりしています。私の友人は、IDYF の次期大会の参加者募集を心待ちにしています。

最後に、言葉では表現しきれない IDYF への感謝を改めて述べ締めの言葉とさせていただきます。

OBOG からの感想

IDYF 創設者の一人である宇佐美絃一さんから IDYF2017 に寄せてコメントをいただきました。

IDYF5 周年を迎えて ～どこから来て、どこへ行くのか～

2012 年に国際開発ユースフォーラム (IDYF) を設立してから約 5 年が経過し、2017 年 3 月に 5 回目となるフォーラムが開催されました。その間に運営陣も含めて 300 人近くのユースが IDYF に参加し、いまそれぞれの想いを胸に、それぞれの道を歩んでいます。ここでは、IDYF5 周年を迎えて、未来に寄せる思いとともに当時のことを振り返りたいともいます。

当時の IDYF は、「世界からユースを集めて開発に特化したフォーラムを開催したい」という大きな夢を持った実績のない団体で、運営陣も関東・関西に渡る寄せ集めでした。創設間もない団体にお金を出してくれる基金やスポンサーはほとんどおらず、挨拶に行くたびに、本当に会議を開催できるのか、世界各国から参加者は集まるのか、来年以降も持続的に活動できるのか、といった疑問を投げかけられました。しかし、私と共同体表の池上には、自分たちが動けば必ず開催できるという信念がありました。

資金を獲得するため、起業家、大学教授、紹介を受けた社会人など数十人近くの人と会いましたが、会ったからには何か得るまでは帰らない (帰れない) という姿勢で臨んだことを覚えています。もらった指摘・アドバイスはすべてメモして持ち帰り、運営陣と団体や活動内容をブラッシュアップして次の人に会う、その trial and error の連続。運営陣とも昼夜を問わず議論を繰り返すようになり、不思議と運営陣の間にも「何としてもフォーラムを開催するんだ」という強い思いが生まれ、お金が徐々に集まっていきました。今振り返れば、強い信念に従って突き進んだことで、寄せ集めの人たちが仲間となり、ふわっとしたテーマが地に足の着いた議題となり、最終的にはフォーラム開催の資金基盤を

獲得することにもつながったのではないかと思います。

IDYF の理念である「Design Our Future」は、そうした一人一人の思いと行動が重なって実現できるものだと思います。大事なことは、行動の大きさや周りからの評価ではなく、強い思いを行動に移すことです。自分は何を実現したいのか、自分は何ができるのか、どうしたら成し遂げられるのか、そういったことを考える一人でも多くの人が IDYF に参加し、今後も自分の思いを実現していってくれることを願っています。

最後になりますが、IDYF が多くの方々の支援や情熱に支えられてここまで続けてきましたことに感謝申し上げるとともに、引き続きのご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

宇佐美紘一

第7章 運営報告

事業スケジュール

IDYF2017 は以下のようなスケジュールで行われました。

2016年8月	運営組織発足 IDYF2017 大会テーマの策定
2016年9月~10月	議題や選考課題の設定
2016年11月~12月	参加者選考
2017年1月~2月	ビザ手続き、プログラムの調整
2017年3月12日~19日	IDYF2017 開催

後援・協賛

本年度も多くの企業様・団体様のご支援により、当フォーラムを無事開催することができました。IDYF スタッフ一同、改めて厚く御礼申し上げます。

【後援】

外務省

独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

【協賛】

株式会社 ビービット

【助成】

一般社団法人 東京倶楽部

公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団

(以上五十音順、敬称略)

また、後援・協賛といった形以外でも数多くの方々にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

会計報告

	項目	金額 (円)
収入		
	参加費	950,000
	助成金	2,400,000
	協賛金	100,000
	オプションツアー余剰	10,340
	前年度繰越金	251,732
	合計	3,712,072
支出		
	宿泊費・会場費	1,304,790
	食費	873,249
	参加者渡航費援助	562,482
	謝金	21,316
	交通費	133,978
	雑費	36,739
	通信費	110,999
	次年度繰越金	668,519
	合計	3,712,072

運営スタッフ

運営スタッフ構成（所属はフォーラム開催当時）

役職	氏名	所属
共同代表	田原早耶香	東京大学経済学部経済学科 4年
共同代表	斉藤美沙季	お茶の水女子大学文教育学部人文科学科 4年
研究	葛島早紀	東京大学教養学部 4年
研究	大宝菜都美	筑波大学社会・国際学群国際総合学類 4年
研究	須田美聡	東京外国語大学国際社会学部国際社会学科ロシア地域 4年
渉外・会計	金田瑞希	東京大学経済学部経済学科 4年
渉外・会計	橋本佳奈	東京大学公共政策大学院 1年
渉外・会計	寶玉潔	東京大学経済学部金融学科 4年
総務	高橋亜紗美	大阪大学人間科学部人間科学科 Global Citizenship 専攻 3年
総務	横川和花	お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環 4年
総務	野村梨世	学習院大学文学部心理学科 2年
総務	吉川綾乃	お茶の水女子大学文教育学部人文科学科 3年
広報	佐藤真由	順天堂大学国際教養学部国際教養学科 2年

その他、多くの当日スタッフの方にもご協力いただきました。誠にありがとうございました。

おわりに

ここまで最終報告書をお読みいただき、ありがとうございました。多くの方のご協力を頂き、この IDYF2017 の開催に至ることができました。運営一同と参加者を代表し、心より感謝申し上げます。各企画やグループワークの報告を踏まえ、IDYF の 3 つの目標に沿って、最後に IDYF2017 の成果と課題を総括し、本書の結びといたします。

IDYF2017 の成果と課題

目標 1 : 「国際開発に関心があるユースの継続的なネットワーク構築」

◆成果

世界中から高い志を持つ若者が集まり、国際開発について各々の意見や経験を語り、一つの発表に向けて 1 週間共に取り組む、という場を創出できたことは、例年と同様、国際開発ユースフォーラムの大きな成果だと考えています。

今年度も、開発に関わる様々な分野を学ぶ学生から、NGO や民間企業で働く者、学校の教師など、世界中から多様な若者が集まりました。本年度は特に、経済的困難を抱える参加者に対し、過去最高人数である 5 名への渡航費・参加費援助を実現することができました。彼らの中には、初めて国外の地を踏んだ者もあり、経済的困難を抱えながらも地元で精力的に地域の開発課題について学び考えている人に対し、国際的な場において自らの取り組みを発信し、他の人の考えを知る機会を提供することができたことは、大変意義のあることであつたと考えています。また、奨学金生 5 名は、ケース課題に基づいた課題分析のプレゼンテーションにおいて各々の経験や知識を共有するにとどまらず、グループワークでのリーダーシップも発揮しており、他の参加者に良い刺激を与える立場となっていました。このように、経済的困難を抱える人への門戸をより広くすることで、IDYF がより多様な参加者の集まる場へ、そしてより多くの若者に国際的な交流機会を提供できる場へと近づくことができたと考えています。

また、会議において参加者同士の絆を最も深めたのは、最終報告会へ向けたグループワークでした。様々な背景を持って集まったメンバーの意見を合わせて合意形成をすることは困難であり、多くのグループが苦勞していました。時に意見の衝突やすれ違いという困難に直面しながらも、1 週間膝を突き合わせて議論し、最後に一つの発表を創り上げた、という経験から生まれたチームの絆は、このフォーラムで最も印象強いものであつた

という感想を多くの参加者から得ています。すでに同窓会を開く計画を立てたり、自分たちのアイデアをさらに洗練させようとしていたりしているチームも見られ、今後のつながりの継続も期待しています。

今年度は、チーム内での人間関係構築にとどまらず他チームの参加者とも交流する場を創りたいという運営の思いから、初日のディスカッションはランダムなチーム構成で行い、夜の時間には多くのソーシャルイベントを開催しました。結果、チームの垣根なく互いの距離を縮めている参加者の様子を見ることができました。

◆課題

参加者の多様性のさらなる追求と、長期的に継続するネットワークづくりが今後の大きな課題だと考えています。

まず、今年度も 149 カ国以上から 3000 名を超える応募がある中、約 3000 名のうち約 2500 名は奨学金枠への応募でしたが、奨学金生として招くことができたのはわずか 5 名でした。多様な専攻、多様な国籍、多様な経験を持つ若者を集めることを達成してきましたが、参加者の多くは経済的に余裕があり過去にも同様の国際的な機会を得てきている人であったように感じます。経済的背景を足かせにすることなく、多様な若者に機会を提供するためには、奨学金のための経済的基盤を確立していく必要があります。

また、1 週間にとどまらないネットワークづくり、過去の IDYF 参加者の縦のつながり構築も大きな課題の一つです。Facebook グループページ上で各々が関わっている活動の広報や様々な機会への応募情報の共有などがすでに始まっており、個人間ではメッセージのやり取りや SNS 上での交流が行われていますが、IDYF2017 全体としての今後の動きを活発化していくためには、運営側からのより積極的な企画も必要であると感じています。

また、IDYF2017 に留まらない、IDYF アラムナイという大きなネットワーク関係構築も目指したいと考えています。昨年度より Facebook で IDYF Alumni Network のグループページを開始しましたが、そのグループ上での動きは稀に行われる情報共有や次年度の IDYF 告知などの限られたものになっています。IDYF という共通の経験を持つ人たちがより気軽に連絡を取り合い、互いに刺激を与えあえるようなプラットフォームを創るべく、施策を考えていく必要があります。

目標 2 「自らの価値観、知識、考え方の幅を広げる機会の提供」

◆成果

多様なバックグラウンドを持つ参加者同士の議論、そして外部組織の方々との連携強化の 2 つによって、上記目標が達成されました。

まず、多様な背景を持った参加者が集まる IDYF では、毎日の議論が異なる考え方、価値観の発見の連続であったはずですが、例えば、2日目に全体で行った、開発において大切だと思う要素を順位付けして並べるワークショップにおいては、安心安全、自由、自主性、強固な政府など様々な要素について、各参加者が熱く思いを述べている姿が印象的でした。また、最終発表へ向けたグループワークにおいては、合意形成の過程において意見をぶつけあいながらも、その背景にある互いの経験や思いに耳を傾け、歩み寄りながらチームとしての成果物を創り上げようと試行錯誤する参加者の様子が見られました。

次に、今年度は外部組織の方から学ぶ機会を設けることで、参加者同士の学び合いに留まらない、より多様な知識を得ることができるフォーラムとなりました。丸一日のフィールドワークを通し、各ケース課題に関わる日本の組織を実際に訪れ、お話を伺う機会を設けました。「アフリカの花屋」などビジネスをされている方から、有機農業を行っている農園・自治体の方、また国際労働財団など第三者の立場から産業を見ている組織など、様々な関係者の視点からのお話をお聞きすることができました。参加者同士の机上での議論だけでなく、より実践的な知識を得ると同時に、実際に社会で活動しておられる方々の想いに触れることもできました。

◆課題

フィールドワークにて多様な立場の方々よりお話を伺うことができましたが、日程調整の難しさなどから、フィールドワークの経験とディスカッション内容が間接的な関係にとどまってしまうものもありました。幅広く得た知識を元に一つの議論をより深めていくためには、議論内容を詰めていく過程の初期から訪問先を念頭に置きながら企画立案し、参加者によってより深い学びや思考の場となるような工夫が必要であると考えています。

目標3「社会に新たな変化をもたらす成果の創出」

◆成果

社会に新たな変化をもたらす成果の創出としては、最終報告会での解決策の提案が挙げられます。例えば、バングラデシュの衣類産業チームでは、工場労働者特有の身体障害を予防するために体操をする、ブラジルの大豆産業チームでは、農業に関する情報を蓄積し農民主体で効率的な農業経営を行う、ケニアの切り花チームではアプリを作って農家と消費者を直接つなぐ、など様々なアイデアが生まれました。こうした解決策は、世界中から参加者が集い、議論やフィールドワークなどの共通の経験を通じて生み出した成果であり、まさに目標3「社会に新たな変化をもたらす成果の創出」に合致するものであると

いえるでしょう。1週間という限られた時間ではありましたが、変化の種を考え出すような成果を出すことができたと考えております。

◆課題

課題としては、単なる提案発表に留まってしまい、実際の行動に移すことができていない点です。せっかく魅力的な新しい提案であったとしても、実際に活動を通じて本当に現状を変えていく段階にまで到達することはできておりません。これは、運営側がテーマ設定時にどこまでをゴールとするかに依存しております。仮に、本当に実行可能な提案をし、実現していきたいと考えるならば、現地の関連団体等と協力し、会議を運営していく必要があるでしょう。今回は、「開発とは何か」という大きなテーマから、特定の産業での解決策策定というレベルまでの幅広い議論を通じて、参加者が互いの価値観を共有し、将来の糧にしてみようというゴールを一番に掲げました。そのため、議論の成果を実際の活動に移す段階までは想定しておりませんでした。毎年の運営が何をゴールにするかという点に大きく依存しますが、「課題分析から解決策実行まで一貫して行う」という点は、IDYFの今後の大きな課題であると考えております。また、今年度の参加者のなかから「自国で自分が活動している団体とIDYFで連携して何かしてみたい」もしくは、「次年度の運営に参加したい」など参加後もIDYFに関わっていきたいという前向きな声が多く寄せられたため、彼らと協力してぜひ形にしていきたいと考えております。

【発行主体】

国際開発ユースフォーラム 2017 運営チーム

国際開発ユースフォーラム 2017 の開催を目的とした運営組織。13名の大学生・大学院生で構成される。2016年夏に発足し、開催準備を担った。

HP : <http://www.idy-ttokyo-forum.com/>

Facebook : <https://www.facebook.com/idyforum/>

国際開発ユースフォーラム 2017 報告書

2017年7月 発行

